逆の発想・キミ子方式とは

松本キミ子
（美術の授業研究会）

1. 美術家で食えなくて，先生へ

東京オリンピックの翌年，1965年に，私は東京芸術大学彫刻科を卒業した。ヴェトナム戦争に突入し，経済に活気が出て伸びている時代であった。「何をやっても，食べていかれる。芸術家には，良い時代」のような気がした。

しかし，赤ん坊を抱え，大学院生の夫いる私には，「どうやったら，食べていけるの？　絵や彫刻は売れない」という現実が社会には待っていた。

私は画家や彫刻家なのだから，どんな職業についても，かまわない。ただ，食うために何とか仕事にありつきたいと，必死になった。2年程，様々な職業につくが，子育てとの両立に疲れはて，教員免許状を持っていることに気がついた。学校の先生なら勤務時間がきっちりしているので，子どもを保育園にあずかってもらえそうだ。

教員免許状をとった時は，全く教師になるつもりはなかった。大学へ行きたいと母を説得する時の口実に「大学を出たら，学校の先生になれるのよ」と言った手前，免許状をとったまでだ。

実は，当時の私は，学校の先生という職業を軽べつしていた。<安定><地味><世間の常識>，これらのイメージは，芸術家になりたい私には，敵のようなものだった。しかし，芸術では食えない。稼がねばならない。毎夜の酒盛りや，ガソリン代，そして，おしゃれや制作費には，お金がかかるのだから。

あちこちの市の教育委員会に配った履歴書のおかげで，中学校美術の非常勤講師の採用通知がきた。

中学校の美術は，大学の時のように，課題だけ与えて，「自由に創意工夫して創作せよ」と言ったら，教室中がおしゃべりの巣になる。40人の生徒たちのおしゃべりは大騒音で，これに耐えることが私の仕事になった。「給料をもらっているのだから我慢しなければならない」と授業が早く終らないかと，時計ばかり見ていた。

冗談や夫婦げんかの話をした時だけは，静かに聞いてくれる。晴れた日はなるべく学校外へ連れだす。近くの公園や多摩川の土手へ，「写生」と称して出かけた。「絵はセンスだから」「芸術は教えるものではないから」と信じていたので通信簿をつけるのは，すごく簡単だった。

非常勤講師の合い間に，石彫し，公募展に出したり，油絵の個展をしたりして，自分は芸術家だと，言い聞かせていた。

それにしても，指導なるものは全くできないので，「指導書」と書いた本を見つけた時，小躍りして喜んだ。こんないいものがあったのかと。夢中で読み進む私は，不安になった。意味がわからないのだ。私は一般常識がないからか，子育てして，頭がボケたのか。でも，すぐ，いいアイデアが浮かんだ。生徒の前で直接読み上げればいいんだ。実行したが，生徒たちに通じないようだった。

私は芸術家なのだから，芸術家の雰囲気が生徒たちに伝わればよい。それしかできないと，開き直って，7年間ほど，8つの小・中学校の非常勤講師や産休補助教員をした。

大学を出て9年め，1974年，ある小学校の産休補助教員をしていた時である。「あーあ，今日も生徒をどなって，のどがカラカラ」と職員室にもどった。「えっ松本さん，どならなければならないような，つまらない授業しているの？　僕の授業見に来てごらん」と，音楽の先生は言った。私は見に行った。

いつも私の目の前で，死んだようになっている子や，おしゃべりばっかりの子が，別人のような生き生きした顔になって，合唱していた。目の前が真っ暗になった。「失恋」という言葉が浮かんだ。<ヨソの女の前で生き生きする男と同じだ。私は愛されていない>。それにしても，「全員が生き返る授業というものが，この世にあったのだ」というのがショックだった。それまで，子どもたちが美しくなるのは下校時間だと思っていた。「わかる，わかる，私もなのよ」と見ていたのに，下校時間よりも，休み時間よりも生き生きしていたのだ。

「どうして，そんなふうになるの？　図工の授業でもできるの？」とその先

生に相談した。「都教組図工部の研究会に行きなさい。ある人を紹介しよう」とアドバイスをしてくれた。

会場には「一人一人を大切にする教育」という意味のスローガンがかけてあった。これが私を打ちのめした。今までの私の生き方を否定するものだったからだ。誰よりも独創的であらねばならない。他人をけおとし，自分だけがとびぬけることを目指していた私に，学校の先生は，「一人一人」と「すべての人」のことを考えている集団だったのか。

半年程前，小学校3年生の私の長男は，「学校不適応児」と担任より告げられていた。長男は高熱と腹痛を繰り返していた。もし，一人一人を大切にする授業ができたら，うちの息子も救われるかもしれないという母親としての切ない願いがあった。今まで，絵は才能だから，あなたには無理と切り捨ててきた子どもたちの痛みが，私の息子の痛みと重なり，そんな子を持った親の痛みまで予想できた。「一人一人を大切に」のスローガンに涙が流れてきた。

さっそく本を買いあさった。都教組の会場で出会った，滝口泰正氏の『絵で一番大事なことは』(私家版，1974) と，山梨新しい絵の会の『低学年の美術教育』(百合出版，1973)を買う。

「低学年の美術教育」を見て新鮮にうつったのは，もの1つだけを画用紙の中に描いていることだ。バックをどう描くかが，私自身が絵を描いてきての悩みでもあったから，バックを描かず，もの1つだけを全員が描けるようにはできそうだと思った。

絵が描けない，嫌いというのは，「ほんもののように描けない」という悩みであるようだ。もの1つなら簡単だ，と思いきや，これが全員を描けるようにするとなると，やっかいだ。テキストどおりにやろうとするが，「話し合う」「よく見させる」というところが具体的にどうすることかわからない。

一方，私は彫刻科出身なので，時々，輪郭線を描かずデッサンをしていた。それを，ある日，メザシのモデルの時に，小学校4年生に試してみた。「口から描く絶対形をとらないで」と言っただけだ。それが，芸大彫刻科の学生のようなデッサンになった。素人の小学生も，的確な指示をすれば，美大生と同じものができるということを1回だけ体験していた。

輪郭線を描かないということにこだわった私は，次に「うさぎ」をモデルに

持ってきた。「うさぎにはヘリの線がないから描かないでね」。たっぷり遊んだらその感動が自然に絵になるにちがいないと思っていたが，遊んでるだけで，やっぱり輪郭線になったりした。「下描きはしないで，直接，絵の具で」と指示はしたが，うまくいかない。

「なぜ描けないのか」「うさぎと遊ぶってどういうことか」と，私は無意識にうさぎをなでまわすうちに，うさぎに毛並があることを発見した。

ものには流れがあるんだ。うさぎには毛並という流れが。鼻の頭から出て，しっぽで終っている。描き始めをどこにしたらいいのかを教えればよかったのではないかと反省した。

次の学校に移って，偶然にも，極楽鳥花を1本おみやげに持っていった。それをモデルに，描き始めを指示し，ものの流れにそって描かせてはどうだろう。極楽鳥花は単純な花だ。時間を稼ぐために，三原色と白で色をつくって描かせれば，2時間の図工がうまるだろうと，考えた。

「三原色と白だけをつかい」「直接絵の具で，成長の順に描く」と指示した。すぐに反論がきた。「下から描いたら，かんじんの花が画用紙の中に入らないよ」。私も反論する。「画用紙が足りなかったら足して，あまれば切る」これは反射的に口から出た出まかせだ。私は極楽鳥花を1本持って，教室に立った。

2. キミ子方式の発見

三原色と白を混ぜて，描き始めの1点の色をつくる。そのことのために，パレットを持った子どもたちが，極楽鳥花を持つ私の手元に集中する。子どもたちの目付，顔付，動きのきれいなこと！ ついに私にも奇跡が起こったのだ。「人間って，こんなに美しかったのか」「小学生も，作家と同じだ」とショックだった。

赤，青，黄，白しかないので，描き始めの色をつくるために，絶対に，描き始めの1点を見なければならない。1点だから，視点が合って，見ることができるのだ。自分の感じた色になっているかどうか，何度も点検する。決定するのは，本人なのだ。一人一人が自分の満足に向かって追求した結果が，微妙に違った色にできあがる。しかし，まぎれもなく極楽鳥花の色だ。大きさも，同じ大きさ，同じ形ということは，全くない。

いつも何度も言う「よく見て！」のセリフを一度も言わないのに，最後まで黙々と描き続け，「できた！」とか「描けた！」「ヤッター」とはずむ声があちこちからあがる。

「たのしかった。うまくいった」と授業が終ると言いながら，子どもたちが期待に満ちた顔で「次何描くの？」「動物はどう描くの？」「人間は心臓から描くの？」と，質問ぜめにする。

何を，どう描かせると，アノ奇跡を起こすことができるのか，私の苦しい悩みの日々が始まった。「なぜ成功したのか」を知りたくて視覚心理学，文化人類学，美術史，科学，教育心理など手あたり次第に文献を読みあさり始めた。

三原色と白で，自分が感じた色をつくる。これは文字における「私は」と同じように，自己表現の第一歩だ。

描き始めの１点を決めるのは，ものには流れがあり，植物なら生長の順，動物は鼻かロから，毛並，羽並，うろこの流れがでている。その流れは，ものを触る流れ。その流れにそって，隣へ隣へと，色違いと，質感（筆の向きやタッチ，水の量，速度）で描き広げていく。画用紙が足りなくなったら，足し，あまれば余分なところを切りとる。こうして最後に構図を決める。従来の絵を描くための方法である，構図を決めて，形を描き，色をぬるのとは逆である。ただ逆にしただけで，ほんものそっくりの絵が画用紙の上に再現できる。

障害者も含めて，すべての人が絵を描けるようにすること，これが，私のあこがれる願いなので，すべての人ができないものは，人間としてはやってはいけないことだ。そのために，クラスの中で，一番弱そうな人に視点をあてて，その人が喜んで絵を描けているかどうかを見ることにした。そうすると，「何を描くのか」ということが最も重要になってくることがわかった。

絵が描ける喜びは，まず描いた本人が，「描けた！」と喜び，それを他人に見せて，「ほんものそっくり」と認めてもらうことである。そのためには，描いた人と，見る人の両方が知っているものでなければならない。

誰でも知っているもので，ふだんは見過ごしているもの。絵を描くことによって大発見のあるもの。描き終ったあと，そのものが大好きになる価値のあるもの。こういうものが絵の「モデル」にふさわしい。

一番はじめに「何を描くか」これが最も大事である。そして，「次に何を描

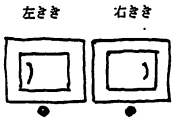

図1

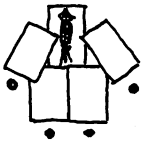
図2

図3

くか」も重要である。「次に」は，前のものを否定するための「モデル」でなければならない。

キミ子方式では幼児から老人まで，はじめに「もやし」を描いてもらう。このモデルは小学校高学年以上大人老人までうまくいき，幼児には苦手である。

絵が描けないと傷ついてきた歴史の長い人を，優先して救わねばならないからである。未来のいっぱいある，回復力の早い幼児や児童は，否定から入っても充分間に合う。次のモデルは「イカ」である。幼児が喜び，大人は苦手である。逆転するのである。

このようにして，何を描くか――モデル――の厳選が約250ほどあり，今後も増えてきそうだ。

数年前から，「もやし」の前に，「三原色と白による色づくり」を楽しんでもらうことにした。これなら，300人くらいの大人数でも，一度に楽しんでもらえ，筆などの道具の心配がいらないからだ。「三原色と白で，世界中の色ができる」というのは，それだけでほとんどの人が感動してくれる。それで「色づくり」もモデルの中に加わった。

そのモデル――描くもの――を決め，１つ１つに，描くものと作者の位置，道具，姿勢，手順などを明確にしているのがキミ子方式である。基本は，植物の「もやし」，動物の「イカ」，人工物の「毛糸のぼうし」である。

「もやし」を描く時は，モデルは一人一個，一枚の黒画用紙の上に置く（図1），文字を描く姿勢で，顔を動かさなくても目に入る大きさのモデルを０号の自然の毛の筆で，根元をもち，描く手を画用紙に置いて，ゆっくり息をとめる感じで，根っこを描く。茎はスーッと，豆はグチュグチュ，葉は葉脈を描い

て，葉脈以外を描く。画用紙の余分なところを切り，白い台紙に貼る。

動物の「イカ」のモデルは4人に1ぱい。(図2) 床にはいつくばって描く。15号以上の大筆を上の方を持って，たくさんの色と，水もたっぷり入れて，あわただしく，だらしなく描く。描き順は三角のテッペンからさわり順に胴体，顔，前足，後足。画用紙がほとんど足りなくなるから足す。出来上がった絵を展示する時は，天井や壁に，あっち向き，こっち向きに貼る。

人工物の「毛糸ぼうし」(図3)は8人のグループで1つのモデル。描く画用紙と同じ画用紙を毛糸のぼうしの下に置く。真横から描く。4号の筆で，リズムカルに抽象化して描く。描き順は，編み順に，ふあっ，ふあっと。画用紙を足す人と，切る人に分かれる。この3つを基本に，理想的ローテーションがある。例えば小さな草花などの絵を描いて，ハガキ大のワクで切りとり，「絵はがきづくり」。規制品の大きさ4つ切大の画用紙に描く「空」などがある。

生きているにわとりやうさぎを描く時は，配置をその動物に合わせて，にわとりは，止り木に，うさぎは目線より高く，狭い台の上にのせ，絵を描く側が動いて，にわとりは口，うさぎは鼻から，動物をかわいがる手つき(毛並，羽並をなでる)に合わせて，筆を動かしていく。

大木を描く時は，生長の順に描くわけだけれど，根元を描く時は，根元で描き，上の方へ描き進める度に，根元から離れて描く。

人工物も容器は，カッチリと鉛筆などで形を描き，底から，隣へ隣へと色ちがいをぬりえしていく。自転車や複雑な建物(寺など)は複雑な一点から，隣へと形を描き，色をぬる。

油絵，彫塑，版画，てんぺらにも応用がきく。小・中学生用の不透明水彩絵の具で出発した描き方だったが，透明水彩，油絵，てんぺら，版画，彫塑などにも応用がきく。

3. 絵を描くことをすべての人の喜びに

1979年――キミ子方式を発見して4年後に，私のガリ刷り本が[2]「授業科学研究2」(仮説社，1979)に「絵の描けない子は私の教師」として掲載される。それと前後し，仮説実験授業研究会の人々があちこちで実践してくださる。わけても，千葉の小学校教師堀江晴美は，2年間キミ子方式を行ない，その間克

明な授業記録を書いた。その中で，「子どもたちにとってキミ子方式とは何だったのか」[3]という小学校6年生の卒業論文集は，私に自信をつけさせた。

「キミ子方式で絵を描くようになって，うまく絵がかけるようになったけど，それだけではなく物の見方やあらわし方，自分が変ったことなどたくさんあります。

キミ子方式をやる前は，赤まんまやいろいろな小さな草花を見ても，絵にかいてみようなんて思いませんでした。また，花をかくときは，いつも花びらをかいてから茎をかいていました。花以外のものをかくときだってめちゃめちゃで，私は『物の見方やかく順序は自由だ！』と思っていました。

でも今の私は，もうちがいます。絵の具は三原色，そしていろいろなものを『これは生きているんだ』と思って絵をかいています。

ばかにしていた木，草，花，どんな小さいものでも今では「かきたい」と思うのです。その物の色，形，かき方の順序，それを考えていると，道を歩いていて見つけたなんでもないものでも，かきたくなるのです。たった赤，青，黄，白の絵の具からいろいろな色を作り，そして世界に1色しかない色にするのです。とっても楽しいことです。

ものをさわったり，見たりして表わすやり方，私はずっと忘れていたようです。キミ子方式に会えてやっとわかったんです。

水をかくにしても，前の私は，みんな水色にぬってしまって，やわらかい水の感じなんかつかめなかった。「感じをつかむ」ということが本当に絵を生かすことだと思いました。感じ，ものの表現を忘れている絵は死んだ絵。

ものの感じをつかむ，見るということは，これからもいろいろと生活の場でも役立つことだと思っています。キミ子方式をやるようになって私は，とっても成長したようです。」(早川貴子)

1982年にキミ子方式に関する単行本が4冊出版されたので，飛躍的に普及した。小・中学校の先生をはじめ，科学者，数学者，主婦たちにである。その年あるカルチャーセンターで幼児たちに出会う。幼児は言葉が通じないけれど触感でものをわかろうとするから，キミ子方式にぴったりだった。2時間も3時

間も，絵を描いていて飽きない。それを見ている母親たちに伝わる。

藤沢市や国立市の公民館では老人たちにキミ子方式を教え始めた。ある老人は授業後に「僕たちのように，あと何年生きられるかわからないものは，練習を必要とするものは，もう間に合わないのです。キミ子方式はいいですね。練習がいらず『もやしの絵』は20分でできあがる。手軽で，安上りですし」と深深と頭を下げられた。

日本に来ている外国人や，旅先で出会う外国人にも伝わる。英語力がなくても，手つき，体つきで伝わる。「三原色と白」「自然のなりたちにそって」「さわる順に」と言うだけでいいのだ。

「音楽広場」[4]に2年半にわたり連載されたのでピアノ教師や保母に広がった。1988年10月より，高崎芸術短大で教え，そこで未熟児網膜症で全盲の音大生，黒田啓恵に会う。「色づくり」「もやし」「イカ」「ネギ」を描いたあと，点字で感想文を書いてくれた。

「……(略)……先生はまず実物をさわらせ，それから色の説明をなさいます。私は絵を描く前に野菜をさわることによって，いくつかの新しい発見をしました。モヤシをさわって感じたことは，そのかたちが大変かわいらしく，まだ小さくヒゲのあることでした。

私はその時，自分がものをさわる時には，今までこんなに集中していなかったことに気づきました。スーパーに買いものに行き，母が野菜をさわらせてくれても表面的にしかわかっていなかったのです。しかしこういうことは，自分で実際に（キミ子方式の）絵を描いて初めてわかったのです。……略……」

さて，絵の得意な美大生の福島理絵は，「はっきりいって，私は大学に入って，絵を描くことがあまり好きでなくなりました。わけのわからない課題を出されて，悩んで，悩んで，その結果できた作品は，自分でも納得がいかないし，まわりの人のどの作品よりおとってみえて，本当に今は何で絵を描かなくてはならないのかわかりません。ただ純粋に絵が好きで学校に入ったのに，なんだか悲しいです。でも今日のキミ子方式の授業で，たった4つの色からほんとうにたくさんの色ができる，できてくるのを見て，なんだかとってもワクワクうれしくなりました。『もっとできる。もっとできる』と思うとなんだかとっても楽しかったです。私はキミ子先生の授業は『彫塑』[5]以来ですが，いつも先生の授業をうけたあとは，何かトキメクものがあるのです。私は今日の授業を自分におきかえて考えてみました。私だっていろいろな色をそんなに多くないけどもっていて，私にも無限の可能性があるはずだと思いました」と色づくり授業後の感想文の中でいっている。

絵を描くことをあきらめていた市民たちが私の本を見て絵を描き始め，グループ展や個展を開く。静岡の横山栄子は個展[6] 3回めのパンフレットに書いている。「毎日草むしりをしながら，これで一生終ってしまうのだろうかとむなしく思っていた時，新聞でキミ子方式を知り鳥肌が立つほどふるえ『これだっ』と思いました。その時から地球上の色が変わりました。ろくでもない雑草が，灰色な気持になるくもり空がすばらしいものに見えるようになりました。」この時，彼女は45歳。

電話交換手が，主婦が，小学校の先生が，キミ子方式で絵が描けるようになったいきおいで，武蔵野美大の通信教育をうけ，8人は卒業し，10名は在学中である。今後も増えていきそうだ。

書物から学んだのではなく，生きた人間，名もない素人の小・中学生から学び，鍛えられ，励まされたキミ子方式。学校教育のワクをこえ，ハンディーある人も含め，あらゆる職種，年齢を超え，少年院，ホスピス，レクリェーション協会と広がる。地球上すべての人々に楽しんでもらえるのは，もうすぐ目の前。絵を描くことを特別な人だけができる特別なものから，だれでも楽しめるものへ，やっととりもどせそうだ。

〔注〕

1) モデルとは描くもの，対象物をいう。「テーマ」「モチーフ」など人によって言い方がちがうが，私は「モデル」という。
2) 松本キミ子；『絵のかけない子は私の教師』私家版，1987.
3) 松本キミ子；堀江晴美共著『絵のかけない子は私の教師』仮説社，1932.
4) 月刊誌，クレヨンハウス，1937.3～1939.12.
5) 松本キミ子；『ひろびろ三原色彫刻篇　うさぎ』ほるぷ出版，1986.
6) 横山栄子個展，1991.4.27～5.6，キミコ・ブラン・ドウ.